

東京藝術大学「藝祭」関連資料の調査・公開の手法と実践 —体系的アーカイブに向けての考察—

大絵晃世・一ノ瀬健太

はじめに

「藝祭」とは東京藝術大学(以下、「藝大」)の学園祭の名称である。1903年の「第一回美術祭」に由来をもち、本年2017年で114年目を迎える¹。美術学部と音楽学部の学生たちが共同で企画・運営を行い、期間中は一般大学の学園祭と同じような模擬店の出店に加え、芸術の専科大学ならではの展覧会・映像上映会・演奏会・オペラ・演劇といった催しが行われる。大規模かつ歴史のある伝統的な学園祭であり、大学全体をあげて文化コンテンツを発信する主要な年間行事のひとつである。なかでもとくに注目される中心的なイベントとして「御輿パレード」がある。これは学生自身が「御輿」を制作し、それを担いで大学周辺を練り歩くというものである。「御輿パレード」は、商店街、観光連盟をあげてのイベントとなっており、地域とも密接な関わりをもってきた。近年では、テレビ局に取り上げられることも増え、「御輿」は、官公庁関連のイベントにも展示され、企業や神社に買い上げもされている。



図1 藝祭の「御輿パレード」のようす
(撮影:総務課広報係)(2015)

しかし、このように社会的な意義が大きいにもかかわらず、藝祭にまつわる記録物、関連資料の保存に関して、学園祭というその刹那的な性質や、毎年委員が入れ替わることが原因して体系的に記録されていない。例えば買い上げ以外の御輿は藝祭の直後に取り壊されるため、写真すら残されていない年があることや、御輿のデザイン案のスケッチやイベント情報など、記録としても重要であるパンフレットやチラシも保存されていない年がある。毎年制作される多くの創作物、またはその記録が離散している現状である。加えて、1903年「第一回美術祭」に始まり、昭和中期に「藝祭」と名を変え、昭和後期～近年「藝

祭」に至るまでのその歴史は、大学百年史²の隙間で少しずつ描写されるにとどまり、体系的に年表化されていない。

藝祭では、学生たちの普段の創作活動の枠内にとどまらないかたちで、さまざまなメディアを使った多彩な表現(立体造形、ペインティング、音楽、パフォーマンスなど)が制作・発表される。

こうした資料の収集・整理を体系的に行い、目録化・保存・公開—アーカイブ化³—を図ることによって、藝大の潜在的な制作物を新たに認識させることができ、約130年にわたる藝大の歴史を、具体的な制作物を通して視覚的にたどることが可能となる。藝大生と上野の歴史、その時々社会や芸術に関する潮流を総括的に捉え直すこともできる。加えて社会的にもその必要性を発信することで、藝祭における創作物の社会的意義を構築し、藝大の社会的存在感を高めることができる。それは、藝大生の御輿や演奏といった作品群がより広く身近になり、地域住民や企業が何か「アート」と関わることをしたいというときに、必要とされる大学となっていくということだ。

また、大学そのものの歴史の体系化にも繋がるかと仮定した。藝大に限らず大学の歴史の記録は各大学の史料室などの役割であるが、同じように大学史のなかで学園祭が語られることは目にするが、学園祭の歴史のみを取り上げた詳細な年表や資料収集の活動は見かけないため、本調査はその先駆けともなることができよう。

この仮定にしたがって、執筆者らは2015年7月～2016年3月にかけて資料調査・公開を行った。本論は、この藝祭の関連資料を収集・調査・整理・公開した手法の解説を通じて、この問題点の解決策を考察することを目的とする。

本論の構成は、まず第1章にて聞き取り調査を含めた、学外・学内による資料収集、第2章にて年表作成・目録化などの資料整理、第3章にて展覧会とWeb公開を中心とした公開のそれぞれの手法と実践について述べる。最後にこれらによって見えてきた新たな問題点、今後の体系的アーカイブに向けた具体的方策を考察する。

なお、本調査は藝大内の組織「総合芸術アーカイブセ

ンター⁴」に執筆者の大絵が所属し、上記の企画を提案し、業務として行ったものである⁵。

第1章 資料調査

資料調査は、藝祭に関わる組織の多さから広範囲に及んだ。それらを大きく「学内」と「学外」に分けて論じる。まず、学内の各所に所蔵されている資料の調査について述べ、次に学外の商店会や谷中・桜木町など周辺の地域に所蔵されている資料の調査を述べる。加えて、これらの資料の裏付けや、時系列的な情報を得るための聞き取り調査について触れたい。

1-1 学内の資料

学内の資料は、さまざまな場所に点在するかたちで収集・保管されていた。

以下にそれぞれ場所の調査について述べる。

1) 学生課

まず、藝祭に中心的に関わる職員組織として学生課を当たった。学生課の倉庫のひとつ(事務局・保健管理センター1階)から1980年代の写真アルバムが段ボールに入った状態で8冊発見された。このとき資料の紹介をしたのは、元学生課職員の四ツ釜豊氏だった。

2) 総務課広報係

総務課広報係は、大学の広報用に2003年から毎年藝祭の主要イベント(御輿パレード、法被コレクション、展示)のデジタル写真撮影を行っている。

アーカイブセンターからの協力依頼によって、それらの

写真を学内サーバーを通じて閲覧・使用できるようにしてもらった。これらは年代ごとにフォルダに整理され、デジタル写真であることから撮影時のメタデータもデータのなかに残っており、年代の判別は容易だった。

3) 附属図書館

東京藝術大学附属図書館は毎年藝祭実行委員会が寄贈する「藝祭パンフレット」を所蔵している。また、『美術祭記念帖』⁶という第一回美術祭の記録冊子も所蔵しており、それぞれ必要な部分を、写真撮影およびスキャニングによってデジタルデータ化した。

パンフレットは欠番があったものの、在職している教員、学生、卒業・修了生への呼びかけによって1999年、2002年、2003年、2007年のものが集まり(詳しくは1-2学外の調査の項を参照)、調査後に附属図書館に寄贈した。現在も欠番となっているのは1947～1953年、1962年である。このパンフレットには、藝祭のイベントのプログラムが記載されており、別途収集している他の資料の年代の判別や、年表整理にもっとも役立つ資料となった。

『美術祭記念帖』には図1のような写真が掲載され、当時の様子を視覚的に知ることができる。一方、同じく図書館に所蔵されている同時期の「校友会月報」には、文章による詳細な記録が残されている。例えば、第一回美術祭は、天長節にあたる11月3日に行われ、それにちなみ菊の葉で飾られた門が作られた、といった描写である(そのようすが『美術祭記念帖』でも伺い知ることができる。図2中央上)。この日付になった経緯も、当初9月に予定されていたが予定が何度か延期された結果天長節に合わ



図2 『美術祭記念帖』(東京藝術大学附属図書館所蔵)より第一回美術祭の様子(1903)

せることになった、といった成行きによって決まったことまでが詳述され、藝祭の黎明期の慌ただしい様相を伺い知ることができる。この引用は百年史でも行われていることだが、今回他の資料と合わせて独自に推察したことは、当時の仮装行列の伝統と、モニュメント(図2右端)を作るという伝統が今日の御輿パレードに繋がっているというものである。これについては後述したい。

4) 藝祭実行委員会

藝祭実行委員会が使用している学生会館地下1階の部屋は、倉庫のように物が乱雑に置かれた状態だった。そのなかで御輿の模型となる「マケット」が50体発見された。また、近年に制作された法被も多数発見された。その他、藝祭開催に関する事務的な資料(申請書、業者とのやりとりの資料、組織図、連絡網など)が乱雑に棚のファイルに入れてあったが、資料がある年とない年がまばらにあり、何を保管するかも決まっていない。

5) 音楽学部大学史史料室

ここには1946年の第一回藝祭のパフレットが所蔵されていた。この史料室は主に音楽学部の資料を所蔵しているところだが、このパンフレットには当時の演奏会の題目などが記載されており、それゆえこの史料室に保管されていたものと思われる。

藝祭を中心に運営するのが美術学部であることが多いためか、その他の資料はあまり発見することはできなかった。



図3 第一回藝祭のパフレット
(音楽学部大学史史料室所蔵) (1946)

6) 教育資料編纂室

ここは『東京芸術大学百年史』の編纂を行ったこともあり、戦前戦後の写真資料が多く見つかった。肖像権等の問題⁷から展示やWeb公開での使用は不自由であった。しかし制約はあったものの、年代などのキャプションが付いている点は、時系列の整理に非常に役立った。これらの資料は藝祭に関するものを選んでスキャンし、データ化

を行った。

写真資料と図書資料を対照させるかたちで資料群の解釈が広がりをもせることもあった。例えば、図4は、1940年に仮装競技が行われた際の写真である。この写真は別途図書資料にて調査していた美術学校卒業生・権田竜一郎氏の挿絵つきの手記『振りかえってみると』⁸で描かれているものと、内容が一致している(図5)。同書のなかで、自身は画面右端に見えるラクダに変装した二人組のうち、後ろ足の人物であると明かしている⁹。



図4 運動会仮装競技スナップ「彫刻科の『ピラミッドとラクダ』」
(『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第3巻』より) (1940)



図5 図3と同じ情景を描いた
『振りかえってみると』の一部(原画) (1994)

7) 在学生、在職者、各科、各専攻

全教職員、学生に対する全学メールによる呼びかけ、各科の教員室への聞き取り、さらにチラシを学内にも掲示した。その結果、法被、パンフレット、写真などが多く集まった。

以上のように、藝祭の資料は学内に散在しており、その収集は困難を極めた。藝祭の記録を体系的に集約させていくには関連資料の収集と保管を意識的に引き受ける組織が必要だということが一連の作業によってわかった。

また、本稿では深く取り上げないが、筆者らは試験的に2015年度の藝祭の写真や映像による記録をとり、編集、公開(展覧会、Web)したことを付け加えておく。

1-2 学外の資料

学外の資料については、藝祭に関係した組織・個人にそれぞれに直接アポイントを取り、調査を進めた。学外の資料の収集場所は主に卒業・修了生、各商店会・観光連盟、寺院、藝大周辺の地域、商店会が撮影を委託している写真家、二科会、新聞・雑誌社の7つである。

1) 卒業・修了生

まず卒業・修了生に対して資料の提供を求めた。手法は、美術学部同窓会の「杜の会」に協力を求め、同窓会報に資料の収集を呼びかけるチラシを同封してもらった(なお、音楽学部の同窓会「同聲会」は会報を出す時期が合わなかったこともあり、同聲会職員に聞き取りをするにとどまった)。学外の資料の収集においては、この会報に挟んだチラシがもっとも効果的であった。また、筆者を含めた調査員たちが個人のSNSのアカウント(主にFacebook)を通じて卒業・修了生たちに呼びかけたことも効果的であった(表1 収集方法別資料点数参照)。

収集された資料の媒体は様々で、欠番のパンフレット、戦後直後の藝術祭の写真や宣伝用のポストカード、ポスター、写真アルバム、法被、8mmフィルムをデジタルデータ化したディスクなどだった。

ここでは、年代判別や、百年史やパンフレットに掲載してある情報を裏付ける具体的な写真群についてのみ触れておきたい。例えば図6は、同窓会報に挟んだチラシを見て資料を郵送してくれた石黒氏の提供資料である。これは、1953年に起きた彫刻科の学生が大火傷を負った火事、「安珍清姫事件」(学内での俗称)が起きる直前の状況を写した写真である。当時、仮装行列やモニュメントが中心になっていたが、それをキャンプファイヤーで燃やすというのが伝統になっていた(後述する杜の会役員インタビューより)。これは火事が起きる直前を映した写真で、ここまで接写で状況がよくわかる写真は百年史にも掲載されておらず、大変貴重なものだ。また、石黒氏が添付した手紙によって、明確に当時の状況がわかった。



図6 事故前の「安珍清姫」仮装の様子
(石黒功氏寄贈資料)(1953)

また図7は、筆者がSNSを通じて連絡を取り合うことになった藝大建築科卒業生の古嵩氏からの寄贈写真である。ここには「喧嘩御輿」のようすが写されている。御輿パレード以前「喧嘩御輿」が行われていたが、1979年におきたとされるピアノ科の学生が指を挟む事故をきっかけに、喧嘩御輿は廃止された。このように、卒業生から提供された写真資料は、パンフレットや聞き取りから得られる情報を補う資料として有効であった。

また、この資料提供をきっかけに提供者にも聞き取りを行うことができた。



図7 到着した資料の一部 1980年代の喧嘩御輿の写真群(古嵩寛志氏寄贈)(2016)

このように、百年史やパンフレットの実事確認が行われるとともに、具体的に当時の様子が感じ取れる資料群が卒業生から集められた。その他にも、日本画専攻在学時の村上隆と制作した風神をモチーフとした御輿が写っている1987年の写真(佐藤宏三氏貸与資料)など、卒業後に著名になった人物の関連資料が出てくることもあり、後々価値をもってくる可能性も感じた。

2) 各商店会・観光連盟

次に、上野中央通り商店会、上野中通商店会、上野六丁目商店会、上野観光連盟などの組合に聞き取り調査や資料提供依頼をした。ここでは2000年以降の写真資料の提供があった。今回の調査の全体としてはアルバムや写真フィルムといった物理媒体の提供が中心だったが、六丁目商店街の宇野吉晴氏からは資料をデータで受け取ることができた。また、観光連盟からは欠番パンフレット(2003)、上野中通商店会からは法被の貸与の協力を得

ることができた。

3) 寺院

周辺の寺院関係もあつた。藝大にもっとも近い護国天大黒寺では、写真アルバムが見つかった。写真が趣味という住職が保管していた。推定して1980年代のもので、御輿のデザインが鮮明に映っており貴重な資料となった。一方、他の寺院では、あまり成果が得られなかった。特に寛永寺などは寺院を構成する組織が大きすぎ、聞き取り調査すら許可が出ない状況だった。大雄寺、玉林寺、佛心寺なども当たったが、写真は残っておらず、また以前は地域を回遊していたという御輿パレードの目撃情報もほぼ得られなかった。

4) 藝大周辺の地域(個人、店舗、公共施設、町会等)

藝大の周辺の上野桜木町、谷中などを中心に資料を所蔵する人がいるかを調査した。上野桜木町の元写真店経営者や、同じく上野桜木町在住の写真家の自宅を訪問し、写真やフィルムの現物や、デジタルデータをもらった。しかし近年のものしか見つからなかった。彼の向島の倉庫にそれらが保管してあるということだったが、調査中に彼が入院することになり、結果的にその倉庫は調査できなかった。

その他、谷中防災コミュニティーセンターにチラシを設置したり、各町会にチラシを配り、回覧板で回してもらった。これは地元住民とのコミュニケーションという点においては重要な行為だったが、あまり効果がなかった(唯一、後述する六丁目町会の宇野吉晴氏がちょうど上野桜木町周辺に居住しているということもあり、連絡をくれたということはあった)。また、店舗などを一軒一軒まわり、聞き取りも行ったが、あまり有効ではなかった。

5) 商店会が撮影を委託している写真家

写真家の自宅を訪問し、話を聞いた。写真データは2005年頃のものから多く所持していた。しかしこれは総務課広報係がデジタルデータで撮影している範囲の年代であり、新しく発見された年代というわけではなかった。フィルムのものであるということだったが、それらは整理・保存状態が良くなく、デジタルデータ化するのにも時間が掛かるということで、調査をできないまま終わってしまった。4)の件とも同じように、アナログのフィルムや写真が大量に保存されていたとしても、それらが検索可能な状況でない限り、調査ができないということが起きた。

6) 二科会

美術団体「二科会」(1914～)にも資料閲覧に赴いた。藝大の卒業・修了生を含む二科会の創立メンバーは銀座などへのパレードを行っていたが、これが現在の御輿

パレードの原型になったといわれる¹¹。二科会の図録から、パレードや東京都美術館の前での仮装の様子などの写真を収集できた。また、藝大出身で二科会に来たという方の話を聞くことができた。ただ、二科会のパレードが藝祭のパレードに影響したという確証は得られなかった。

7) 新聞・雑誌社

新聞データベース検索によって、何度か藝祭のことが取り上げられていることがわかった。データベースは、毎日新聞「毎索」と、記事内の単語にも検索がかけられる読売新聞「YOMIURI ONLINE」、朝日新聞「聞蔵」を使用した。その結果1903年の第一回美術祭の様子が各紙で詳しく報じられたことや、1946年「爆笑をまく行列」(毎日新聞)、1951年に「珍作で見物わかつ」(朝日新聞)などといった見出しの「芸術祭」の様子や、1967年「芸大の芸術祭—ニュース・グラフ」(朝日新聞)といったように報じられていたことがわかった。また、藝大非常勤講師の織田このみ氏から、実際記事としては使われなかったが、朝日新聞社によって撮影された紙焼きの写真現物を同氏が保管しているという連絡があった。1983年に口から煙を吐くゴジラ御輿の様子である。しかし、写真の著作権は朝日新聞にあり、使用には料金が掛かるため、展示会には残念ながら出品できず、スキャンのみを行った。加えて、雑誌記事も検索したが、ほぼ検索に引掛からなかったため、雑誌類に関しては聞き取りによる調査から逆引きしていく形で利用した。

以上、学内と学外に分けて記述した。資料提供者数は計55件である。以下に、資料提供者とそれに対する手法と収集点数を表記したもの(表1)、またその収集数を表にしたものを媒体ごとに表記した(表2)ものを添付する。なお、今回収集された資料のうち寄贈資料は、現在音楽学部大学史史料室に保管されている。

表1 収集方法別資料点数(単位:点)

	資料提供者	手法	提供者 件数	資料 点数
学 内	在校生・在職者	学内メーリングリスト	10	162
		スタッフ直接の呼びかけ	4	16
	学生課	学内メーリングリスト	1	524
	卒業・修了生	杜の会	16	209
		SNS	8	105
		スタッフ直接の呼びかけ	7	55
	アーカイブセンターHP	1	1	

学 内	周辺地域	直接交渉	2	341
	二科会	直接交渉	1	16
	商店会	直接交渉	4	2830
	寺院	直接交渉	1	47
	計		55	4306

表2 媒体ごとの収集数(単位:点)

写真	デジタル画像	3204
	紙焼き	1039
	アルバム	6
映像	データ	4
	DVD-R	2
	VHS	3
	Hi8	2
	miniDVテープ	5
法被		27
パンフレット		6
その他		8
計		4306

※貸与資料を含んでいる
 ※元々資料が存在していた図書館、総務課広報係、教育資料編集室、新聞社の資料は除いている
 ※権田竜太郎氏による書籍の原画は除いている
 ※「スタッフ直接呼びかけ」は展覧会スタッフが知り合いなどを通じて呼びかけたものである。多少全体メールでの呼びかけやSNSなどと重なる部分があるが、適宜主要な手法を選定した。
 ※御輿マケットは大学所蔵とし、含んでいない
 ※紙焼き写真をスキャンした状態での寄贈はデジタル画像として計算
 ※アルバムは、藝祭以外のものも写っていて枚数の算出が難しかったものは冊数で計算している

1-3 聞き取り調査

学内外の資料収集に加え、卒業・修了生、職員や地元の商店街関係者へのインタビューを行った。近年、注目を集めているオーラル・ヒストリー¹³⁾は文献資料ではほとんど残らない当時の状況を把握できるという利点がある。今回の調査ではデジタル機器を用いて映像と音声を取得した。聞き取りと並行して他の資料も収集していたため、インタビュー内容と他の資料によって相互の事実確認を行うことができた。以下に詳細を述べる。

・聞き取り対象

藝祭関係者18名¹⁴⁾(東京藝大卒業修了生、職員、大浦食堂店主、上野商店街関係者)に対して行った。幅広い世代、幅広い地域となるよう、藝祭関係者18名を選出し、記録を試みた。ただし、藝祭が美術学部の特に男性が中心になって行われることが多かったためか、音楽学部の卒業・修了生や女性に対する聞き取りは少なかった。

・聞き取り方法

機材は手持ちのハンディカムを2台使用した。インタビューと機材担当の2名で取材を行った。基本的にひとりの

人を対象に用意した項目に関して順々に回答を得た。他にも、三者で語らせる鼎談形式での聞き取りも行った。



図8 インタビュー動画から
(左から西山三郎氏、新井健司氏、深澤孝哉氏)(2014)

図8は、同窓会「杜の会」の役員らへの鼎談形式でのインタビューの様子である。彼らの証言から、前述した「安珍清姫事件」(1953)以前は、モニュメントを燃やす「キャンプファイヤー」の催しが行われていたということが確認された。写真資料のみでは、燃えている様子がわからないものが多く、なぜ「安珍清姫事件」において火事が起きたのか、歴史的な脈がわからなかったため、その理由の判別に役立つ証言だった。この事件をきっかけに、キャンプファイヤーが中止され、モニュメントを担ぐスタイル、つまり御輿に移行していったと推定される。

その他、日比野克彦氏(2017年現在先端芸術表現科教授)のインタビューでは、前述もしたが喧嘩御輿の終了の年代を特定することができた。同じく喧嘩御輿に関して証言をしてくれたのが保科豊巳氏(2017年現在絵画科教授)であるが、図9の「長嶋茂雄御輿」の映像資料を直接見せることにより、御輿の上に乗っている人物(図9右)が、保科氏本人だという事実確認ができた。また、この当時の御輿の素材が木材を中心に作られており、非常に重かったことや、いかにして相手の御輿を壊すかという点に重点がおかれていたか、などが二人の証言からわかった。

以上のように写真、映像などの資料とインタビューによる資料収集を行った。

第2章 資料の整理

上記の調査によって、部分的に年代の欠落はあるものの、予想していたより多くの資料が収集された。本章では、それらを体系化していく土台を築くための作業について述べる。まず資料をスキャンや撮影などによりデジタル化し、それらを目録化する作業について述べ、続いて、それらから得られた情報を編集し、年表を作成する過程について触れる。

2-1 資料のデジタル化・目録化

資料は、媒体も様々であり、管理には保存場所と目録化が必須であった。以下、媒体ごとにその整理方法を述べる。

1) 御輿マケット

マケットは修復が必要なもの以外は、学生会館の地下で引き続き保管することにした。総務課広報係の画像資料やパンフレットを参考として、マケットの制作年代、制作した学科、タイトルを特定し、目録化を行った(便宜上、タイトルを仮称にしたものもある)。

2) 法被

無造作に置かれていたり、ポリ袋に詰め込まれた状態で発見されたが、ひとつひとつをアイロンで伸ばした後、絵柄ごとに写真を撮影し、画像ファイルと目録の番号を対応させて保存した。

3) 写真資料

収集された写真資料は寄贈と貸与に分けた。いずれの場合でも、受取順にして通し番号を振り、年代、サイズ、寄贈・貸与の別などを記した。

4) 映像資料

卒業・修了生から集まった資料のなかに、1974～1976年の、1985年の8mmテープをデータ化したDVDがあった。また、学生課からは1991～1994年のHi8や、VHSの資料が集まり、これは外部業者に委託してデジタル化を行った。内容は喧嘩御輿の映像、不忍池の周りを御輿が通る映像、ガムラン部のコンサートの様子など、今では失われた伝統が映し出されているものもあり、インタビューから得られた情報を確認する貴重な資料となった。



図9 映像資料より「油画家長嶋茂雄御輿」(奈良晋裕氏寄贈資料)(1974～76)

5) その他の資料

最後に特殊な資料として、美術学校の卒業生が自費出版した書籍から、遺族に連絡し、原画をデジタル化したというものがあつた。前述した権田竜太郎『振り返ってみると』という著作であり、美術学校時代の思い出を絵と文章で綴っているものである。権田氏の遺族と連絡をとり、この著作の原画をスキャンしデジタルデータ化したことは、大きな成果であった¹⁵。同書が予算の関係で白黒刷りだったため、カラーの原稿をデータ化できたからだ。

なお、目録の分類項目としては、調査日、提供者、調査方法、年代、内容、資料媒体、点数、受け取りの形態(貸与・寄贈の別)、返却方法(貸与の場合)、住所、承諾書、保管場所(デジタルデータの場合、サーバー内での場所)を設けた。

2-2 年表化

前述したように、年表化の際にもっとも役立ったのが藝祭パンフレットであり、次に、『芸大百年史』であった。それらの間を埋めたり、裏付けとしての聞き取りによる証言や、新聞社のデータベース、一部の書籍を利用した。ただ、調査期間が限られていたためこの作業は十分なものとはいえず、簡略化した年表を展示するにとどまった。しかし、今後肉付けしていくべき年表の基礎を築けたことはひとつの成果だろう。

作業方法はGoogle Driveの共同編集機能を使用した。ExcelのBookをアップロードし、それぞれのだいたいの年代の担当を決め分担して同時に編集していくという方式を取った。

これらの手法により、資料の目録化と、年表作業は、年代の特定なども含め同時進行で行われていった。

図10は年表の穴埋め作業のPC画面である。縦(行)に時系列、横(列)に、和暦西暦、一般史、パンフレットから得た情報、百年史から得た情報、イベントの内容、藝祭タイトル、御輿に関する情報、と整理して配置した。

図10 年表を埋める作業のPC画面

年表作成で穴埋めとして必要だった情報は、例えば竹と和紙の張りぼてで御輿を作っていた時代から、発泡スチロールに移行したのはいつか、など百年史に掲載されていないことであった。聞き取り調査と写真資料からの素材の推測により、張りぼてから発泡スチロールへは1990年から2000年頃にかけて徐々に移行していたことがわかり、その間は素材の試行錯誤がみられる。

年表化にあたる検証の過程や詳細は本論の趣旨には直接関わらないため、別途改めて詳述する機会を設けたい。

第3章 公開の手法

ここまで、資料の収集・整理をどのように行ったのかを記述してきた。本章では、本章ではそれらの資料を公開した手法を詳述する。公開の意図は、展示による興味づけによって、学内においては祭の開催に集中するあまり優先順位が低くなる「記録」の行為に対する意識を高めることであり、学外に対しては藝祭の魅力を伝え、アーカイブに対する後援を将来的に訴えかけていくというものだ。また同時に、より広く学内外に情報を共有できる手段として、資料展示とWeb公開という方法をとった。

3-1 展覧会での公開

展覧会は、下記の開催概要で行った。

展示タイトル：藝祭100年の歴史展 “A 100-year history of GEISAI : Festival of Tokyo University of the Arts”

副題：1903-2015 東京美術学校〈美術祭〉から〈藝術祭〉を経て

キャッチコピー：藝大生の真剣(マジ)な遊び

会期：2016年3月23日(水)～3月30日(水)

休館日：3月28日(月)

開館時間：午前10時～午後5時(入館は閉館の30分前まで)

会場：東京藝術大学大学美術館 陳列館1階、大浦食堂

主催：東京藝術大学総合芸術アーカイブセンター

協力：上野「文化の杜」新構想実行委員会、

東京藝術大学芸術情報センター



図11 展覧会のフライヤー
(表題文字は宮田元学長によるもの) (2016)

美術と音楽、有名なサンバなど取り上げるセクションを分け藝祭を体系的に紹介・解説した。各セクションとも基本的にA0パネルに画像と文字情報で説明していく形で行った。

1) 藝祭の全体の解説

藝祭の概観を解説し、藝祭の熱心な愛好者から藝祭を知らない観覧者まで幅広く展示を楽しみ、藝祭の歴史が学べるように配慮した。また、入り口付近のパネル群のなかでは、元宮田学長と上野商店街連合会会長(当時)早津司朗氏からの挨拶文が寄せられた。

2) 藝祭実行委員会組織図

聞き取りとパンフレットのクレジットを参考に、藝祭の運営の組織図を作成した。用い藝祭実行員会を構成する企画課、御輿課、演奏課、展示課など各課の紹介並びに学生課との交渉や教授会などでの審査など藝祭開催に至るまでの一連の過程を明示し、整理した。

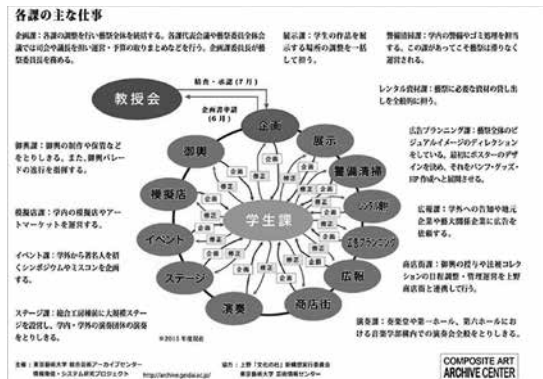


図12 「藝祭実行委員会組織図」(一部)

3) パンフレット

本調査で収集したものを含め、1946年から2015年までの藝祭パンフレットの表紙を時系列順に並べ、パネルで紹介した。前述のように一部欠番はあるものの、当時の時代状況や流行していたデザインなどがうかがい知ることができる。また、展示準備期間中にキャスル¹⁶の福本氏が逝去されたため、パンフレットから福本氏の藝祭に対する思いが綴られた記事を急遽抜粋し展示した。

4) サンバの歴史

藝祭における「サンバ」の立ち位置とサンバの歴史を展示した。藝祭において知名度として御輿と双璧をなすのがサンバである。藝祭サンバに影響を受けて浅草サンバカーニバルがはじまったことが調査で判明¹⁷、それをパネル上で公開できたことは今回の調査の大いなる成果であった。



図13 発足当初の藝大サンバ・パーティの公演の様子
(学生課所蔵資料)(1981)

5)演奏会

音楽学部が藝祭で行う催しは、室内楽から大規模なオーケストラ、オペラまで多様な演奏会など様々である。ここではその映像・音声を公開した。演奏の様子観覧者が選択して閲覧できるようPCモニター、ヘッドホンに加え、マウスを設置した。

6)年表

2-2において詳述した年表を大判出力したものを展示した。藝祭の出来事に加え、学内の歴史と、世界の大きな出来事を併記するかたちで展示を行った。展示会場正面の一番注目の集まるところに配置した。この年表作成がもっとも労力と時間がかかったものであり、本展の中心的存在となった。なお、この年表は現在、アーカイブセンターのWeb上の報告書のなかで公開されている¹⁸。



図14 年表の展示の様子(撮影:小作志野)(2016)

7-1)御輿の歴史

美術祭から続く仮装行列の「添え物」として存在していたモニュメントが起源とされる御輿が、現在の藝祭の中心になっていく過程をパネルによって展示した。現在の御輿行列にいたるまで、火事などの事故により火の使用や喧嘩御輿の禁止が行われ、御輿の上に人が乗っての移動の制限など、禁止事項が増えてきた経緯が判明した。各世代の御輿の写真資料が集まったことで制作される御輿は各世代の藝大生たちが当時、どのようなことに興味を持っていたかをうかがい知ることのできる貴重な資料と

なった。

7-2)御輿制作過程

2010年彫刻科の御輿制作をサンプル映像とし、全過程をモニターにて展示した。デザイン案の打ち合わせから、御輿の原型となるマケット制作、夏季休暇期間の発泡スチロールの切り出しから着色、本番、さらには解体までを記録したものである。これにより、御輿制作を行う学部1年生に対する参考資料としても有効価値が高い。

8)御輿3Dデータ

御輿マケットを3Dスキャンしデジタルデータ化し、さらにそこから手作業によりデータを加工し、実際に3Dプリントし着色を施した物体を展示した。映像モニターとパネルにてその制作過程や3Dデータの扱い過程も展示した。これにより、巨大な御輿やマケットが保存できなくても、3Dデータで残す可能性を示すことができた。

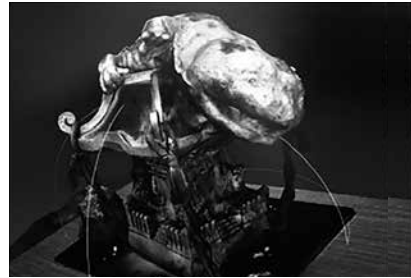


図15 3DスキャンをしているPC画面
(スキャン対象は2015年度工芸科御輿)

9)地域と藝祭

ここではパネル展示により、御輿パレードが桜木町や不忍池周辺といった地域を回遊していた経緯や、商店会との連携によるイベントの開催など、藝祭が地域のなかで作られていく様子を解説した。地域のなかでも、特に商店会との関わりは藝祭の開催において重要であるため、重点的に示した。商店会との関わりは、上野仲通り商店街が1994年に商店街にて「芸術まつり」を、藝祭実行委員会と共催したことに始まる。以後、御輿の賞金などで資金的にも藝祭を援助している重要な繋がりとなっている。



図16 秋葉原に行く仮装行列
(『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第3巻』より)
(1935)

現在のパレードのコースは、上野公園の中のみになってしまったが、戦前に秋葉原まで仮装行列が遠征しており、戦後直後も銀座まで遠征していたというのが証言と写真資料からわかっている。その様子がわかる資料を選び取り、パネル上に構成し展示した。

10-1) 法被の歴史

藝祭では、毎年各科が御輿とテーマを揃えて制作する法被があり、シルクスクリーンで手作りされる。そのお披露目となる、毎年上野公園内の袴腰広場や上野商店街行われる、「法被コレクション(通称「ハピコレ」)」という、法被をまとって行うパフォーマンス公演がある。「ハピコレ」は、上野商店街と藝祭が「フラッグコンテスト」というコラボレーション企画を行ったことに由来する。初めはデザインを競うだけのものだったものが、次第にパフォーマンスが加わり今のかたちに至った。この過程を写真資料とテキストを用いて示した。

10-2) 法被の制作過程

御輿と同様、法被の制作過程も知られていない面が多くある。デザイン案の打ち合わせから、シルクスクリーンでの制作過程、縫製まで法被ができるまでを示した。

11) 東京音楽学校校章ピンバッジの作成

美術学部の同窓会・杜の会では、東京美術学校の校章だった「美」のマークのピンバッジがすでに作られている。今回の展示では美術学部、音楽学部双方の学生たちがひとつになるイベントとして藝祭があるという位置付けのもと、そのシンボルとして音楽学部の同窓会である同聲会のマークの制作を行った。音楽学校の校章デザインを元にした3Dデータの作成、鋳金業者への発注を行った。美術学校と同じく金使用とした。またその作成課程もパネルで展示した¹⁹。

12) 御輿パレード風景の大型引き伸ばし写真

藝祭御輿の大きさを可能な限り再現し、藝祭パレードの臨場感を体感できるように、横幅約4mに及ぶ躍動感ある御輿の写真を用いた。また、隣のセクションには法被の試着コーナーを設け、試着した状態で記念写真を撮ることができるようにした。

13) 法被試着

収集した法被をすべて展示する形式をとった。法被は祭が終わった際には捨てられてしまうものも多く、残ることが少ないエフェメラル資料である。今回の展示では、四ツ釜豊氏のコレクションが多く貸与された。また当時の学長である宮田亮平氏からも多くの御輿の寄贈を受けた。各科の年代ごとの法被が多数集まり、豪華な試着展示となった。展示の際には、卒業・修了生たちが現役の際に

制作した法被を見て、当時を懐かしみ、思い出を語ってくれたケースがあった。これは会場にてオーラル・ヒストリーを収集することにも繋がった。

14) 映像上映コーナー

映像資料に関しては1時間を超えるものなど多数あったが、順々に投影する形式を取った。当時の状況が映った映像が投影されていた時には、長時間座って映像を閲覧している鑑賞者が多数いた。この映像は時間の都合上、展示会場内ではすべてを見ることができないため、Web上で公開している²⁰。

15) 御輿マケット

今回の展示会のメインとも言える各世代の御輿の原型である。2007～2015年にかけて制作された学生会館の地下1階で発見された各年代のマケット50体を展示した。藝大生の制作したマケットは造形力の高さから、多くの観覧者がスマートフォンなどで写真を撮影していた。

16) インタビュー映像上映

インタビュー・コーナーでは、18名のインタビューのダイジェストを大きなモニターで流し、小さなモニターでは個々のインタビューを自由に視聴できるようにした。映像コーナーと同じく時間の都合もあるため、Webサイトでも公開している。

17) 藝祭グッズ

過去の藝祭で販売された藝祭グッズを展示した。これもまた一過性が強く、限定生産のため貴重な資料である。学内職員から借用したクリアファイルやマスキングテープなどの藝祭グッズを展示した。

18) 思い出アーカイブコーナー

展示会場内に設置されたベンチでは、卒業生の来場者が思い出を綴ることのできるノートを設置し、来場者同士の交流の場として設けた。

上記のように、藝祭の様々な諸要素を網羅する展示となり、人手、労力、予算を要するものであった。しかし、7日間の短い展示のなかで2,683人の来場者があり、この展示を機に地方から母校にやってくる卒業・修了生が多く、交流の場ともなったため、有意義なものとなった。

また会期中、アーカイブの意義を考えなおす内容の2つのトークイベントを行った(2016年3月26日)。ひとつは「真剣な遊びを語り継ぐこと」と題し、NHK解説委員中谷日出氏、上野観光連盟事務総長茅野雅弘氏を招いて、展示主催者とトークするものだった。もうひとつは、卒業・修了生を呼んだ座談会で、佐藤一郎元教授、声楽科出身でフジテレビ系「ポンキッキーズ」歌のおねえさんの塚

本江里子氏、建築科出身の君塚和香氏、楽理科出身の館亜里沙氏で、藝祭の思い出を語り合う内容だった。どちらも藝大の在学生や在職者を中心とする来場者と、アーカイブの重要性を共有できる内容となった。

3-2 Webサイトでの公開

2016年の展示会期中から現在(2017年6月)にいたるまで「東京藝術大学総合芸術アーカイブセンター」Webサイト²¹⁾にて藝祭パンフレット、展示写真、インタビュー映像、藝祭映像が公開されている。とりわけ藝祭パンフレットに関しては、欠番はあるものの、一冊丸々全てのページがスキャンされており、過去に行われたイベントや御輿の風景をうかがい知ることができる(現在、一部のデータが公開準備中)。また、本展覧会で展示されたパネル・年表も同Webサイト内の「情報発信システム研究プロジェクト2015年度報告書²²⁾」で閲覧することができる(図17～19)。

アーカイブセンターは2015年度をもってプロジェクトが終了してしまい、再開も未定である。しかし、今回の調査のデータが保存されているサーバーは、同一の管理者によって継続されている。現状ではこの同一の管理者のおかげでデータの保管がなされているが、このように今後、組織改編などがありサーバーが引き継がれたときに、その主体となる組織が藝祭実行委員会や学内組織との連携をいかに行うかなどのノウハウも引き継いでいくことが重要である。具体的には、どのように記録保存活動をして



図17 Webサイトで閲覧できる映像資料



図18 Webサイトで閲覧できるパンフレットのスキャンデータ

図19 Webサイトで閲覧できる展示パネル、年表(2017)

きたかの記録を取っておくなどが挙げられるだろう。

なお、これらの収集資料とインタビュー動画の公開に関しては逐一承諾書を取っている。書面には、公開範囲は展覧会だけではなくWeb上でも可能なか、今後アーカイブセンターの責任で公開することが可能かといった項目を用意した。これにより、持続的な公開と利用が可能となるからだ。

第4章 調査結果の検証と、今後の課題

本調査全体を通じ、保存されているもの、されていないもの、保存先の不確かさが明確になった。以上のことから今後の藝祭の体系的アーカイブ化に向けた具体的な方策を以下に提案したい。

1)パンフレットの納本制度

藝大の附属図書館やアーカイブセンターにパンフレットやデジタルデータ(Adobe Illustrator、Adobe InDesignなどによる編集データ)を納め、後世の人々がアクセスできる環境を整える。年度によって欠番が出ているため、公的な機関に納め、資料の紛失を防ぐ狙いがある。また、藝祭のWebサイトもウェブアーカイブを取っておく必要がある。

2) 御輿の有効活用

御輿には地域振興のシンボルや、企業に有効活用される可能性を秘めている。関係者への聞き取りによると、今までゴジラ御輿(1983年東映 買い上げ)、キリン御輿(2001年、キリンビール買い上げ)、五右衛門御輿(2010年、宮城県石巻市田代島 奉納)、がまつ御輿(2005年、ナワテ通り商業協同組合 寄贈 松本城付近に設置)などの買い上げ・寄贈例があったという²³。御輿は買うことができるという情報をより積極的に社会に発信する必要性がある。運搬方法などの現実的な課題は残るが、これにより御輿も現物として残り、加えて御輿制作費を補填することも可能だ。保管場所の都合上解体されるのは仕方ないが、その場合にはあらゆる角度からの写真や、本調査でも行った3Dデータとして保存しておくことが望まれる。展望としては、本調査の一環でも行ったように3Dスキャンングによりデジタルデータを作り、小さなフィギュアとして販売すれば、より多くの人に身近な商品として印象づけられるだろう。

3) 藝祭実行委員「記録課」の設置

藝祭実行委員の中に、企画から実行、また開催後の反省会の内容までを詳細に記録する課の設置が望まれる。過去の藝祭パンフレットを見ると、2000年代のはじめには独立した課としての「記録課」の存在がうかがえるが、2000年代後半から記録課が課としてなくなり各課の中に記録的役割を持つ担当者が確認できる。以降は記録担当者の存在はなくなり、引き継ぎがより一層曖昧になっていく様子が見えてくる。今回のような展示を学内のどこかに常設したり、藝祭開催期間内に毎年展示する伝統が生まれることがもっとも望ましい²⁴。

記録課が行う作業として、具体的には、1)で述べたパンフレット納本とデータ寄贈を仲介したり、各課で生じた事務書類などを取っておき、ファイリングすることなどが考えられる。また、総務課広報係との協力体制により、藝祭の開催風景の写真・映像記録を撮影しておくことが考えられる。

4) 藝祭実行委員の引き継ぎ

上野中央通り商店街振興組合理事長の水谷雅之氏のインタビューにて指摘されているが、藝祭実行委員の引き継ぎが上手くいっていない状況がある。各課とも体系的引き継ぎがなされておらず、当世代がまたイベントを一から企画することは大変な労力を伴う。ノウハウやマニュアルが体系的に引き継がれれば、初動段階での雑務や事務手続きを効率化・簡略化できる。この引き継ぎは継続的に直接対面することで伝えることが効率的であると考

える。以下の2通りの解決法を提示したい。

a. 藝祭実行委員のサークル化

藝祭実行委員会は1年で解散することから記録が残りにくいという問題点があるため、サークルとして学年を超えた繋がりを形成することで定期的な引き継ぎシステムを構築する。5月から9月の本番までの準備期間だけでなく、藝大周辺的美術館や科学博物館、動物園などを巻き込んだ中長期的協議をイベントとして模索してもいいだろう。

b. 共同体によるイベントの復興

かつて行われていた過去の優れたイベント再復興する。例としては学生・教員・職員の参加を行う不忍池マラソン大会の復活などがあげられる。

5) 副次的に収集された資料の活用

寄せられた資料には藝祭とは関係のない資料も見受けられた。例としてアルバムなどには藝祭の写真と同時に個人の藝大の入学式や卒業制作展、卒業旅行などの写真も含まれていた。これらの資料は、今後の本学の大学史を編纂していく上においても活用可能な資料だろう。今回資料の収集手段として用いた、同窓会を通じた一斉郵送による資料募集や、学内メーリングリスト、SNSを使用した呼びかけは非常に有効であったため、今後も応用して使える方法であるといえる。また、藝祭実行委員と教育資料編纂室、音楽学部大学史史料室との連携なども考えられる²⁵。

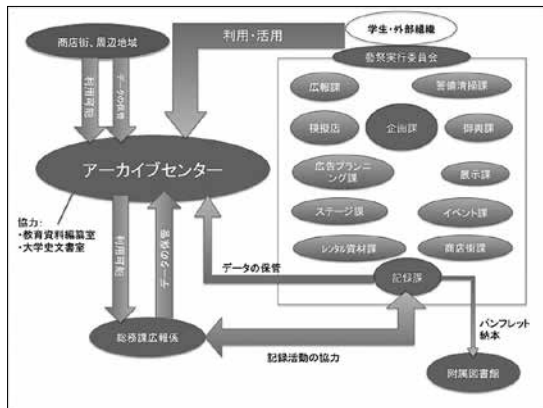


図20 藝祭アーカイブ組織図の案

以上を踏まえて、アーカイブの観点から藝祭組織がいかにあるべきかを図式化したものが図3である。

前述したように、記録課は、図書館にパンフレットを納本し、藝祭実行委員会の各課から生じた事務書類をアーカイブセンターに保管する。アーカイブセンターに集約された情報は、在学生や教職員、外部組織が閲覧できるよ

うにWeb上などで公開する。学内生も、過去を知ることによって、それを踏まえた新しいデザインを考案することによって役立つ。また、外部組織も利用できるようにすることで、御興や法被のデザインなどを自由に見ることができ、外部からの支援を活性化させることに繋がる。

上記のように、情報の循環が起き、時代を超えて藝祭のコンテンツをより強力なものにしていくことができるだろう。

最後に、今回の調査において未解決のままになった点をまとめておく。

● 資料収集上の未解決点…パンフレットの欠番

1947～1953年、1962年が欠番。1947～1953年に関しては開催されたかどうか調査が必要。

● 年表調査上の未解決点…藝祭回数のズレ

2017年度(現在)で70回としているが、これは近年の回数に合わせているだけで、いつを第一回としているかがわかっていない。1946年が第一回芸術祭であるが、その後、1948年などを含めて二度ほど第一回を仕切り直しており、何年を起点とした70回目か、明確にする必要がある。

結章

本調査によって、藝祭の体系的なアーカイブ作成向けの土台となる資料群と年表などが試験的に調査・整理・公開された。本論ではその手法と実際に実践した内容を記し、それらを考案することにより判明した、今後の具体的な資料保存の方法が提案された。

戦時中には一時中断されていた藝祭を、「第一回芸術祭」として新たに立ち上げたのが1946年だったが、このときのパンフレットには、当時の音楽学校校長の小宮豊隆氏のこのような巻頭言が掲載されている。

藝術の使命は社会と接触し社会に浸透し社会を高める点にある。その意味で社会と交渉のない藝術は藝術の外道である。農民が一年の沈潜を秋の収穫によって輝かしい区切りをつけるように、上野に佳い美術と音楽との学徒は、一年の沈潜を藝術祭によって発揚し、自分達の収穫をもって何等かの意味で社会に寄与するところあらうとする。(後略)

この文章には、社会との繋がりや美術と音楽の協同作業など、50年以上経った現代もなお藝大がもっている課題が織り込まれている。藝大と社会の接点としての藝祭をより発展的・想像的内容にしていくためにも、新しい世代が過去の藝祭を知りたいと思ったときに常時閲覧できる

という環境は重要なものとなるだろう。

本論の副題にある「体系的アーカイブ」とは、このような学生たちの残存しにくい制作物を、引き継ぎ形態の工夫や、寄贈の規則を設けることなどによって保存し、それを整理・目録化することが伝統として定着した時点で完成する。今回の調査と検証では、藝祭関連資料収集と整理の手法と、実践した結果を明示した。この資料群と手法が、今後の体系化にむけた起点となることを望んでいる。

参考文献

- 東京芸術大学百年史編集委員会編 『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第1巻』ぎょうせい(1987)
- 東京芸術大学百年史編集委員会編 『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第1巻』音楽之友社(1987)
- 東京芸術大学百年史編集委員会編 『東京芸術大学百年史 演奏会篇 第1巻』音楽之友社(1990)
- 東京芸術大学百年史編集委員会編 『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第2巻』ぎょうせい(1992)
- 東京芸術大学百年史編集委員会編 『東京芸術大学百年史 演奏会篇 第2巻』音楽之友社(1993)
- 東京芸術大学百年史編集委員会編 『東京芸術大学百年史 演奏会篇 第3巻』音楽之友社(1993)
- 東京芸術大学百年史編集委員会編 『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第3巻』ぎょうせい(1997)
- 東京芸術大学百年史編集委員会編 『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第2巻』音楽之友社(2003)
- 東京芸術大学百年史編集委員会編 『東京芸術大学百年史 東京美術学部篇』ぎょうせい(2003)
- 東京芸術大学百年史編集委員会編 『東京芸術大学百年史 大学篇』ぎょうせい(2003)
- 東京芸術大学百年史編集委員会編 『東京芸術大学百年史 音楽学部篇』ぎょうせい(2004)
- 東京藝術大学編 『学報』東京藝術大学庶務課(1954-2004)
- 東京美術学校校友会 『美術祭記念帖』關西寫真製版印刷(1906)
- 東京美術学校校友会編 『校友会月報』東京美術学校校友会(1902-1933)
- 権田竜太郎 『振りかえってみると』権田竜太郎(1994)
- 柴田卓編 『岡倉天心-芸術教育の歩み-』東京藝術大学岡倉天心展実行委員会(2007)

註

- 1 語の使用に関して…年代によって「藝術祭」や「芸術祭」などといった表記が見られるが、本稿では時代を限定して表記する場合を除いて、統一して一連の藝大での学園祭を「藝祭」と表記する。また、組織名は本稿が記された2017年度時点の名称とする。
- 2 東京芸術大学百年史編集委員会編『東京芸術大学百年史』(1987～)を指す(正式な巻号は本論末の参考文献を参照のこと)。本論では以降「百年史」と略記する。
- 3 なお、本論で使用する「アーカイブ」の語は、ある程度の年数の期間内で規則性に基づき体系的に収集・目録化された資料群を指す。
- 4 2011～2015年度に存在した組織。組織内の情報発信システム研究プロジェクトの一環として行った。現在は「東京藝術大学アーカイブセンター」と名前を変え、学内に名称上存続している。本論では「アーカイブセンター」と以降略記する。
- 5 執筆者のひとりの大絵は本調査の発起人であり、展覧会の開催時の展示代表を担当した。また一ノ瀬は「総合芸術アーカイブセンター」の直属ではないが、本調査の主要な調査員のひとりであった。
- 6 東京美術学校校友会 『美術祭記念帖』關西寫真製版印刷(1906)
- 7 またこれには、寄贈した遺族の公開の許諾が百年史への掲載のためであったことから、一次資料の扱いが難しいという問題がある。本論では百年史からの転載という形で行っている。

- 8 権田竜太郎(自費出版)『振りかえってみると』権田竜太郎(1994)画像は遺族の提供による原画をスキャンしたもの。
- 9 また、文書記述による資料はヤシの実がコッペパンでできているといった素材まで、記述されている。
- 10 日比野克彦氏インタビューとパンフレットの情報から推定。
- 11 キャッスルの元店主福本豊氏への聞き取りより。
- 12 大学にもともと所蔵されていたものとして、取集数には含めていないが、校友会室で発見されたものを含めると77となる。
- 13 日本オーラル・ヒストリー学会 <http://joha.jp/> (2017/06 閲覧) 日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイブ <http://www.oralhistory.org/>
- 14 インタビューした人の氏名と肩書き(2015年度のもの)は以下の通り(敬称略)
 - 1、北澤悦雄(大浦食堂マスター) 2、四ツ釜豊(元学生課職員) 3、荒井竜一(学生課職員) 4、半田悠人(2013年度藝祭実行委員 委員長 建築科4年)/安藤悠希(同副委員長 薬理科4年)/中川優子(野外ステージ担当薬理科4年)/小林のんき(展示課代表 芸術学科4年) 5、加々見太地(2015年度藝祭実行委員御輿課課長 彫刻科2年) 6、宮田亮平(学長) 7、渡邊健二(器楽科教授) 8、北郷悟(彫刻科教授) 9、松下功(演奏芸術センター教授) 10、保科豊巳(絵画科教授 社の会長) 11、日比野克彦(先端芸術表現科教授) 12、新井健司(彫刻科1956年油画科卒業)/深澤孝哉(1961年彫刻科卒業)/西山三郎(1962年彫刻科卒業) 13、水谷雅之(上野中通り商店街振興組合 理事長) 14、木村雄二(上野中通り商店街振興組合 前理事長) 15、森重伸悟(上野中通り商店会 環境整備担当副会長) 16、茅野雅弘(上野観光連盟 事務総長) 17、古橋果林(藝大サンバ・パーティ元部長) 18、永武哲弥(藝大サンバ・パーティ創始メンバー 日本画科出身)
- 15 出版されたものは白黒で刷られているため、カラーの原画は貴重な史料となるだろう。
- 16 東京藝術大学内の音楽学部の学食のひとつ。
- 17 1980年に当時の台東区長が藝祭でパレードや演奏を行うサンバ演奏に注目し、まちの地域振興のために浅草に導入したのがそのはじまりであった。サークル創始メンバー永武哲弥氏インタビューより(<http://archive.geidai.ac.jp/4646> 2016/6/24 閲覧)
- 18 <http://archive.geidai.ac.jp/media/txt/reporte-2015-information.pdf> P.311～P.319 (2017/06 閲覧)
年表調査・編集者：一ノ瀬健太、大絵晃世、國島由子、西羽田成美
- 19 このピンバッチ制作は、調査員のひとりの小作志野(修了生)と、音楽学部在学生の西羽田成美ほか数名が協力して3Dデータを作成した。
- 20 <http://archive.geidai.ac.jp/4495> (2017/06 閲覧)
- 21 <http://archive.geidai.ac.jp/4333> (2017/06 閲覧)
- 22 <http://archive.geidai.ac.jp/media/txt/reporte-2015-information.pdf> (2017/06 閲覧)
- 23 なお、ゴジラ御輿とキリン御輿の情報は、聞き取りによるもので、実際に保管されているという情報は裏付けがまだない。
- 24 本調査に執筆者の一ノ瀬が加わることになったきっかけのひとつに、2013年藝祭期間中に一ノ瀬が中央棟で行った「藝祭の歴史展」の存在がある。この展示は「藝祭100年の歴史展」の土台であり、魁的存在といえる。
- 25 なお、アーカイブセンター継続時は、教育資料編纂室、音楽学部大学史料室はアーカイブセンターに包含される組織となっていた。

A Method for the Documentation and Publication of the History of Geisai, the School Festival of Tokyo University of the Arts: Toward Systematic Archival Practices

OOE, akiyo・ICHINOSE, kenta

This paper proposes a practice based method for archiving the history of Geisai. Geisai is the annual school festival of the Tokyo University of the Arts which originates from the time of Tokyo School of Fine Arts (Tōkyō Bijutsu Gakkō). Students of both fine arts and music departments join to plan and manage the festival. Refreshment booths, exhibitions and concerts are organized amongst other festivities. “Mikoshi parade”, a main feature of the festival, along with the “Geisai samba party” have the support of the Ueno Shopping Street and Tourism Association, creating a close relationship between Geisai and its neighborhood. In recent years, the mikoshi parade received increasingly big media coverage, with many television programs and newspapers reporting on the event. Mikoshis are sometimes exhibited at events organized by government administration offices as well as purchased by corporations and shrines. However, in spite of such public interest, Geisai and its related materials have not been systematically archived due to the short-lived nature of the festival. In this research study we gathered, sorted and organized materials, putting in practice the methods of archiving, cataloging and conservation. From July 2015 to March 2016 we examined and published various materials, discovering an opportunity to expand our subject from Geisai to the history of Geidai and the Ueno area, linking them all together. This project could lead to reconsidering the position our university holds in the public domain. Our paper explains the methods of gathering, examining and sorting Geisai related materials, with the objective of demonstrating and encouraging such archiving tasks within the university ..